

聖霊降臨節第5主日 説教 「恩讐の彼方に」 要旨

牧師 黒田直人

日本キリスト教団藤沢教会 2022年7月3日

マタイによる福音書 10:34~11:1

例年より早い梅雨明けとなりましたが、明けていきなりのこの暑さです。そのため、教会までの道のりを考えると、さぞや足が重かったことと思います。けれども、教会にようよう辿り着き、そこで何を感じたのでしょうか。ハ一、涼しい、そう感じてホッとされたのではと思うのです。そして、この、ホッとしたという感覚は、信仰者にとっては欠かすことのできないものです。なぜなら、日曜日、私たちが教会に足を運び感じるものが、このホッとしたという感覚でもあるからです。ですから、このホッとするという感覚が身に備わっていることも大事なことです。そうであるからこそ、私たちは行く先々で、このホッとするという感覚を人に伝えることができるからです。従って、この信徒者泣かせとも言える天候は、私たちに信仰の原点を思い起こさせるものであり、そういう意味で、神様からのお恵みだとも言えるのです。そして、この日、私たちに与えられているお恵みはそれだけではありません。最後に与ったのが1月でしたから、約半年ぶりに、私たちは主の聖餐の恵みに与ろうとしています。けれども、このことはまた、この半年間、私たちは霊的飢餓状態にあったということです。ですから、それが癒やされようとしているわけですから、今日は二重の意味でホッとさせられているということです。従って、こういう時には、是非、気持ちよく御言葉に聞いて、気分良く教会から送り出されたいものですが、しかし、先ほどの御言葉を聞いて、皆さんは何を思ったのでしょうか。

イエス様はこう仰っています。「わたしが来たのは地上に平和をもたらすためだ、と思っただけではない。平和ではなく、剣をもたらすために来たのだ。私は敵対させるために来たからである」と穏やかならぬことを仰るのです。しかも、その上でこうも仰るのです。「人をその父に、娘を母に、嫁を姑に。こうして自分の家族が敵となる」と。それゆえ、このイエス様のお言葉に躓かない者は一人もおられません。そして、私たち信仰者の場合はより深刻です。このままイエス様を信じていいのか、信じ続けることがで

きるのかと、そう思われるものだからです。ですから、ホッとしたのも束の間、御言葉がこのように冷や水を浴びせかけるわけですから、これはたまったものではありません。それゆえ、この日の御言葉は、信徒泣かせであり、牧師泣かせであるとも言えるのです。それは、どうすればここから慰めを受けることができるのかと、私たちを深く悩ませることもなるからです。

しかし、こういう時、普通であれば、私はあまり頑張りません。あっさりとは白旗を揚げるのですが、今日はそれすらも許されません。退路を断つかのようにイエス様はこう仰るからです。「私よりも父や母を愛する者は、私にふさわしくない。私よりも息子や娘を愛する者も、私にふさわしくない。また、自分の十字架を担って私に従わない者は、私にふさわしくない」と、問答無用と言わんばかりにこう私たちに迫るのです。こうして退路を塞がれた私たちは、イエス様のこのお言葉に従うしかないのですが、ただ、これでは信仰の喜びもへったくれもないことになってしまいます。そこで、一言くらいは文句を言いたいところではありますが、ところが、それも許されません。それは、イエス様が「私に従わない者は、私にふさわしくない。自分の命を得ようとする者は、それを失い、私のために命を失う者は、かえってそれを得るのである」と仰るからです。つまり、ここで言われていることは、私たちに与った命の問題であるということです。けれども、わけも分からずに従うわけにも参りません。他に選択肢がないわけですから、せめてその理由だけは知っておきたいと思うからです。

イエス様か、それとも自分の家族か、イエス様がもたらした福音が私たちの命の問題である以上、いずれを選択するかは明らかです。従って、一方を受け取り、一方を退ける以上、対立は避けられません。けれども、イエス様を憎み、十字架に付けた人々は違いました。イエス様以外のものを選び取ったからです。けれども、私たちがそうではない、しかし、そうではないからこそ、私たちの命と深く関わる家族との関係性を引き裂く

イエス様のお言葉に、私たちは深く傷つくことにもなるのです。そこで、現代を生きる私たちの頭の中には、ある一つ言葉が浮かびます。それは、「カルト」というこの言葉です。しかし、あらゆる宗教の重視するものが聖なるものとの関わりであるように、信仰とは、「いずれを選ぶか」ということなのです。そうである以上、この世に投じられた福音は、イエス様が仰るように「剣」であるのは間違いありません。そうであればこそ、イエス様はここで「受け入れる、受け入れない」ということを繰り返し語るので、まただから、御言葉もイエス様と教会の関係を、また、イエス様と私たちの関係を結婚に譬えたりもするのです。従って、イエス様がここでこのようなことを仰っているのは、私たちとの誠実な関係を築きたいから、そして、それは、イエス様がどこまでもどこまでも私たちに對して誠実なお方であるから、だから、それを誰よりもよく知っている私たちは、イエス様との絆をすべてのことにおいて優先しなければならぬのです。けれども、このことは逆から見ればどういうことなのでしょう。それは、私たちはどこまで行ってもイエス様に対しては誠実ではいられないということです。

イエス様との絆を優先することに私たちがもし痛みを感じたままであるとしたら、あるいは、そうした痛みが私たちがもし鈍感であったとしたら、イエス様との絆を誠実なものだと胸を張って言えるのでしょうか。ここでのことが私たちの命に関わるものである以上、そういった自分の気持ちを誤魔化すような態度を、また、敵と味方とに分けるだけの思考停止の状態を、イエス様が誠実な姿だとお喜びになるはずはありません。このように、イエス様に対し誠実でありたいと願いながらも、どこまで行っても誠実でいられないのが私たちであり、そして、そうさせるのは私たちの罪でもあるのです。けれども、この罪については、これまでいくら説明を尽くされても、私たちの内よりただ一度として消滅することはありませんでした。ですから、イエス様がここで強引なまでにこのようなことを語るのには、不誠実な私たちに無理矢理に矯正しようとしてのことではありません。私たちがいかに罪深く、そのためにいかにひどい目に遭わねばならないかを語るのではなく、イエス様が仰ることは、私たちの置かれたこの変えようもない現実です。そして、そう語る目的は、

敵と味方に分けるためではありません。分断と対立を乗り越えたその先をイエス様は見つめておられるからであり、イエス様の誠実さは、まさにそこに現れされるものでもあるのです。それゆえ、イエス様の目指されていることは、「誠実」という言葉を隠れ蓑した、閉ざされた関係性ではありません。すべてを明らかにしているということはつまり、イエス様は開かれた関係性を築こうとしているということです。

ですから、カルトと言われているもののように、閉ざされた関係性の中で、ただただ自分の心の平安だけを願い、隠れるように生きることを、イエス様は私たちに望んでおりません。それゆえ、私たちは、家族や社会から切り離されたところではなく、開かれたところで生きなければならぬのですが、当然、そこには様々な軋轢が生じることとなります。それゆえ、こちらを立てればこちらが立たずという状況の中で、私たちは苦しむことになるのです。ですから、それは、とても辛いことです。周囲から浮き上がり、孤立感を深めることとなります。時にその辛さに耐えきれず、人を攻撃したくなったり、あるいは、信仰を投げ出したくなったりすることもあるのです。ただ、そのような試練は、信仰にとって無意味なものではありません。むしろ、反対に大きな意味を持つのです。そして、それは、自分を強くするという点で意味があるものではありません。確かに、結果として、試練は自分を強くします。けれども、そこで得られる強さとは、傲岸不遜な、面の皮だけを厚くするものではありません。また、数字で表すことのできるものでもありません。数を誇り、人を威圧するだけの強さではなく、柔軟性に富み、人をホッとさせるものであり、まさに現実を現実として受け止めるがゆえの強さです。

福音は、神様の無条件の愛と慈しみに基づくものであり、無条件ということとはつまり、現実を現実として受け止めているということです。ですから、人を人として無条件に愛するということは相手の言いなりになることではありません。現実をしっかりと見据えたものであり、ですから、イエス様は、この愛をここでは「剣」と表現しているように思うのです。それは、この「剣」こそが私たちに束縛する様々な苦しみから、まさに愛をもって解き放つものでもあるからです。ですから、それを考えれば分かることで

すが、仮に私たちにつぶてを投げつける者がいたとしても、イエス様を信じ、イエス様にお従いする私たちにとっては、その者は敵ではありません。イエス様にお従いするという事は、つぶてを投げつけるその人の存在を消し去ることではないからです。イエス様の十字架が明らかにしたように、十字架はそこに立つ、そこにいるということだからです。まただから、イエス様と共に「そこにある」自分自身の姿を見続けることで、私たちは知らされるのです。それは、十字架が闇に閉ざされた場所ではなく、闇の中で光り輝く希望であり、イエス様の発するこの希望ゆえに、十字架に止まる私たちと関わるあらゆる人たちも、それは、愛する家族であり、友であり、隣人でもあります。私たちが十字架に止まり、イエス様が「敵対する」と仰るその人たちとも、私たちが祈りの内に関わるからこそ、その人たちの将来も必ず開かれていくことになるのです。だから、イエス様は「あなた方を受け入れる人は、私を受け入れ、私を受け入れる人は、私を遣わされた方を受け入れるのである。・・・はっきり言うておく。私の弟子だという理由で、この小さな者の一人に、冷たい水を飲ませてくれる人は必ず報いを受ける」と仰るのです。

ですから、罪ある現実の中で私たちの求めるべきは一杯の水であって、それ以上に大きいものではありません。ところが、私たちはそれ以上のものを人にも自分にも求めてしまう。つまり、イエス様がここで「敵対させる」と仰ることは、相手側だけの問題ではなく、私たちにも同様の問題があるということです。まただから、私たちはなお苦しむことになるのです。けれども、それが現実です。それゆえ、私たちはそこで足掻くしかないのですが、足掻くということは、私たちが神様、イエス様と祈るということでもあるのです。それは、その時、私たちには祈ることしかできないからです。けれども、祈ることで私たちは必ず変えられて行きます。そして、その時、私たちは、得体の知れない何かに変えられるわけではありません。神様に与えられたそのままの姿をもって、自分らしく変えられていくのです。そして、それは、かつて私たちが味わったことのあるものです。すべてを受け入れられているという、あの懐かしさを感じさせるものなのです。私たちが主の日の度ごとに教会にこうして集い、ホッとさせられるのはそ

れゆえのことでもありますが、ですか、それは、変えられるというよりも神様に愛されている自分本来の姿を取り戻すということでもあるのです。従って、それは自分自身に言い聞かせなければならぬようなものではありません。ですから、そう考えるなら、イエス様の仰ることはすべて、私たちにとっては懐かしさを感じさせるものでもある。まただから、私たちはイエス様の仰ることが飲み込めた時、「分かった」、「そうだったか」と過去形で語るのです。それは、神様の御心が途絶えることなく私たちに注がれているものでもあるからです。

このように、イエス様は、私たちを困らせようとして、無茶苦茶なことをここで仰っているわけではありません。ところが、私たちは、このイエス様のお言葉を無茶苦茶なものだと感じてしまう。それは、かつて幼子であった私たちが、それだけ不要なものを数多く身につけているからです。多くあれば、多くあるから、だから幸せになれると思っているからでもあります。そのため、この、もったもったの思いは収まることはありません。そして、それは信仰の捉え方についても同じことが言えるように思うのです。しかし、信仰の豊かさとはそういうものではありません。もったもったと独り占めするところに現されるものではないからです。分かち合ってこそそのものであり、分かち合えば分かち合うほど、豊かなものとされていく、それが信仰の豊かさというものでもあるのです。従って、その場合の分かち合いとは、施し、施される関係性ではありません。有り余るほど多くを物を持っている者が、持たざる者に恵んであげるようなものではなく、もちろん、気心の通じ合うものの間だけで成り立つことでもありません。単に物のやり取り、金銭のやり取りだけを分かち合いというのなら、敗戦直後と比較して、社会保障制度が格段に整った今の社会はもっと豊かさを実感できるはずなのです。けれども、社会が今とは比べものにならないくらいに貧しかった時の方が豊かさを実感できたという発言があるのはどうしてなのでしょう。そして、それは、教会についても同じことが言えます。「戦争中、食べることもままならない中での教会生活が、今まで一番豊かであった」と今は天に移されたある姉妹がそう語ってくれたことがあります。それは、そこに主にある兄弟姉妹としての豊かな分かち合いがあったか

らです。そして、その言葉の中にあるものは、状況を分析し、大上段から振りかぶった、理屈としての何かではありません。それは、言葉にしようにも言葉にならないものであり、けれども、その言葉にならないものが私に確かに伝わったのです。

私たちは、分かち合うという言葉を開くと、どうしたらそれができると理屈で考えがちなのですが、それは聖書の御言葉の理解についても同じことが言えるように思うのです。この言葉の意味は何か、どうすれば正しく御言葉を理解し、正しく振舞うことができるのか、信仰をいわゆる言葉の定義の問題として捉えることが多いからです。もちろん、それはとても大事なことです。特に私たちの信仰は言葉の信仰です。ですから、その意味や定義を疎かにすることはできません。けれども、理屈は後からついて来たものであり、それ以前に私たちに語りかけられているものがあるのです。そして、私たちにとっての生命線はここにあるのです。なぜなら、イエス様が私たちに語ることは、ここでもそうですが、イエス様個人の思想のようなものではないからです。イエス様のお言葉は、その経験として語られているものであり、まただから、すぐには分からない。私たちが聖書をこうして読むことを勉強のように思ってしまうのは、このすぐには分からないがゆえのことなのです。まただから、もっともっととポイントを多く溜めることを信仰だと思い込み、そのため、この量的な問題から対立や混乱が深まることにもなるのです。こうして私たちの信仰は、どこまで行っても貧しいものでしかないことが露わにされるのですが、けれども、その貧しい私たちが信仰の豊かさを実感することができるのはどうしてなのでしょう。それは、あれが手に入り、あれができるようになり、そのために人が溢れかえっているからではありません。主にあって私たちは互いに近いからです。先ほどのご婦人の発言は、主にあっての近さを互いに感じさせる関係性がそこにあったからです。そして、それは、私たちも同じなのです。

では、そのために私たちに求められることは何か、それは御言葉の学びであって、勉強ではありません。学ぶということは、私たちに都合のいい何かを効率良く身につけることではないからです。躓くこともあり、傷つくことでもあるのです。けれども、そうやって私たちは御言

葉の深いところにあるものを経験として知っていくのです。そして、それは、私たちがまったく知らないものではありません。すべての命が神様から出て来たものである以上、深く深く御言葉に聞いていくとき、私たちは、神様と共にあることを、イエス様と共にあることを、懐かしさをもって思い出すのです。ただ、このことはまた、私たちがそれだけ説明のつかない、つきにくい状況に置かれているということです。御言葉を自分の納得できるように理解しようとしてしまうのはそのためです。ですから、ここに記されていることに私たちが居心地の悪さや気持ちの悪さを感じるのそれはそれゆえのことでもありますが、まただから、それを何とか解消しようとする、そして、それがあたかも信仰者の使命のように考えてしまうのです。ですから、そういう意味で、敵と味方とに分ける考え方は、この気持ちの悪さ、居心地の悪さを簡単にとでも分かりやすく解消してくれるものです。けれども、それは、イエス様が求めるところではありません。

イエス様が願うことは、私たちが主にあって互いに近いということを知ることであり、そのために私たちが経験として学ぶことになるのがここに記されている破れなのです。ここでは、そのことがイエス様の経験として語られてもいるのですが、けれども、この経験を通じて私たちはそれ以上のものを知らされることになるのです。それがイエス様という大きな存在でもありますが、ですから、すべてのことをここから見て行くな、イエス様がここで仰っている対立、敵対と言われていることも、そのまま終わることはありません。対立という言葉も、敵対という言葉も、イエス様との近さの中で聞いていくな、すべては主にあっては恵みの機会となるからです。けれども、そのために私たちは躓きながらも学び続ける必要があります。そして、それはこの世にあっては終わりはなく、御国に入る日まで続けられることでもあるのです。ですから、そのためにも、私たちはイエス様を間近に感じなければなりません。世界に向かって心を開き、あらゆる人々と主は近いということをつかち合い続けなければならないのです。なぜなら、イエス様のお言葉はすべて、私たちが開かれた世界に導くものであり、対立という形で私たちが安住する、その固く閉ざされた扉を大きく開け放つものでもあるからです。祈りましょう。